

*New stages for molecular pathogenesis and targeted therapy**Tsutomu Takeuchi**

第31回日本炎症・再生学会開催にあたって

竹内 勤*

日本炎症・再生医学会は、本年度で31回目を迎えた。炎症・再生医学会は、病態解析から得られた情報を治療に応用する研究を中心に、産学の重要な議論の場を提供し、長く炎症・再生医学研究の振興に貢献してきた。

その中核として、主に財政面で学会を支えてきた炎症研究振興会は、昨年を持って役割を終え、新たな形で炎症・再生医学会がスタートをきった。新体制となって初めてとなる第31回学術集会の会長を仰せつかり、その重責を今更ながら認識している。この流れは、炎症・再生研究や臨床現場における大きな変化と無関係ではない。ステロイドや非ステロイド系抗炎症薬に依存していた炎症学は、より病態と関連の深い分子標的を探索し治療応用する炎症学へと変貌をとげた。炎症と再生の接点を探り、それぞれの発展をさらに深めようとする新しい炎症・再生医学への展開が模索されている。

このような革命的ともいえる炎症・再生医学における変化を受け、平成22年第31回学術集会のテーマは『炎症再生の分子病態と新たな治療標的』とさせていただいた。国内外で活躍する第一線の基礎・臨床医学研究者にお集り戴き、最新の成果を御披露戴く予定である。

近年の炎症領域での治療大変革は、ベッドサイドの臨床研究から生まれた。基礎免疫学の進歩は、これを大きく下支えたことは疑う余地がない。しかし、最終的に、ある疾患に有効かどうかは、臨床の場においてのみ検証可能である。病態解析とそこから得られた分子標的、そして生物学的製剤による分子標的治療という流れは、今では当たり前のように語られるが、その道筋は決して容易なものではなかった。まして、我が国で開発されたIL-6受容体抗体の開発は、困難を極めた事であろう事は想像に難くない。岸本先生のような強いリーダーシップを発揮される存在があって初めて成し遂げられたのであろう。同じ事は、TNF阻害薬インフリキシマブを開発されたMaini先生にもあてはまる。Maini先生は、開発当初、IL-1阻害薬がTNF阻害薬よりも動物モデルで優れている事が次々明らかにされる中で、TNF阻害薬の開発を進められた。その原動力は、ただ“enthusiasm”のみであったと、話されたことは今でも強く脳裏に焼き付いている。その後の臨床開発にも大きなハードルがあったが、しかし、ベッドサイドでの経験を積み重ねる事によって、それが大きく変わっていった。

*Division of Rheumatology, Department of Internal Medicine, Keio University School of Medicine 慶應義塾大学医学部内科学リウマチ内科 教授

本来は敗血症治療薬として開発されたTNFを標的とする生物学的製剤, 多発性骨髄腫を目指していたIL-6受容体抗体, そして移植拒絶を抑える事を目的としたT細胞共刺激分子阻害薬アバタセプトまでもが, 関節リウマチを初めとする炎症性疾患, 免疫疾患に極めて有効な治療手段であった事は炎症・免疫領域にとって幸運であった. もちろん, そこにはこの領域に情熱を注いできた多くの研究者たちの努力があったのはいまでもない.

一方, 課題も見えてきた. 新規標的の探索や治療薬の効果・副作用予測, 医療経済学的課題, 生理的作用の阻止と関連する安全性上の課題, 製剤上の課題, 適応疾患の拡大, 等々である. また, 生物学的製剤による分子標的治療で, すべてが解決した訳ではない. むしろ, 解決へのヒントとなったと表現した方が良いかもしれない. しかし, 解決に向けてスタート位置に立った意義は大きい. 新しい炎症・再生医学研究がさらなるステージに向けて発展する事を期待したい.